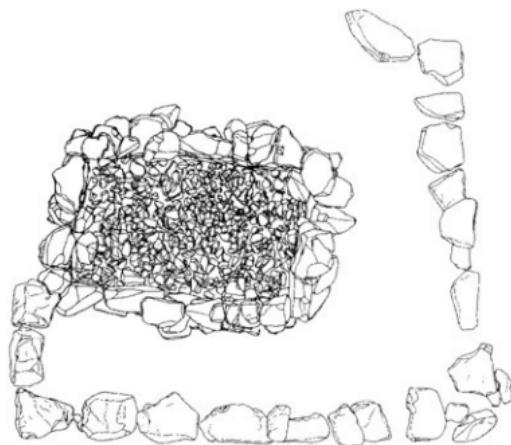


三重県桑名郡多度町多度  
宮地中世墓群発掘調査報告



1997. 3

三重県埋蔵文化財センター

# 序

物理学者の寺田寅彦の名言に「天災は忘れた頃にやって来る」という言葉がございますが、昨今では阪神淡路の大震災の記憶が生々しくわたくしたちの脳裏に焼きついています。これに限らず、自然現象は様々なかたちでわたくしたちに災害となって表われてくることがあります。土石流による被害もその一つで、今回の発掘調査の原因もこうした土石流の起きやすい急傾斜地の崩壊による災害を防止するための事業にあります。

災害を未然に防止することは何よりも優先されるべきことであり、その結果、今回のように文化財保護との両立が時として困難を極める場合もございますが、決して本来は相容れないものではありません。わたくしたちは先人の残した遺跡により、災害の恐ろしさやこれに対処する知恵などを授かるとともに少なくありません。こうした先人のメッセージを大切に後世に残していくことも、将来の災害防止の大きな手段に違いありません。

文末ではありますが、調査に際しまして多度町内の地元の皆様をはじめ、県土木部砂防課および桑名土木事務所、多度町教育委員会のご理解とご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥 村 敏 夫

# 例　　言

- 1 本書は、三重県桑名郡多度町多度字朝坪下地内に所在する宮地中世墓群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成8年度国補急傾斜地崩壊対策事業（朝坪下地区）に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 調査の体制は以下の通りである。  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）  
係長 杉谷政樹 技師 竹内英昭
- 4 本書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センターが行った。遺構・遺物の写真は、竹内と同センター主事部部旁人が撮影し、執筆及び全体の編集は杉谷の監修を受け、竹内が中心となって行ったが、I.-1についてでは杉谷の執筆による。
- 5 調査にあたっては多度町内の地元の方々をはじめ、堀山女学園大学教授江原昭善氏、多度町教育委員会、及び県土木部砂防課・桑名土木事務所、株式会社石川組から多大な協力を受けた。とくに多度町教育委員会の加藤真琴氏には再三にわたり労力をおかげした。深謝いたしたい。
- 6 掘図の方位は、全て座標北で示しているが、現地調査では座標観測を行っておらず、磁方位から補正したものである。なお、磁方位は座標北に対して西偏6° 20'（昭和62年）である。
- 7 本書で報告した遺構の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 目 次

I. 調査の経過	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の成果	
1. 1号墓	4
2. 2号墓	5
3. 3号墓	8
IV. 調査のまとめ	11

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	第7図 2号墓石室実測図
第2図 遺跡位置図	第8図 2号墓出土遺物〈1〉
第3図 1号墓石室実測図	第9図 2号墓出土遺物〈2〉
第4図 1号墓出土遺物〈1〉	第10図 3号墓石室実測図
第5図 1号墓出土遺物〈2〉	第11図 3号墓出土遺物〈1〉
第6図 2号墓実測図	第12図 3号墓出土遺物〈2〉

# 図 版 目 次

図版1上 2号墓全景（東から）	図版4下 2号墓石室近景（北から）
図版1下 2号墓全景（西から）	図版5上 3号墓石室全景（北から）
図版2上 1号墓石室全景（南から）	図版5下 3号墓遺物出土状況
図版2下 1号墓石室全景（北から）	図版6上 2号墓出土鉄釘
図版3上 2号墓天井石検出状況（北から）	図版6下 2号墓出土人骨
図版3下 2号墓天井石検出状況（南から）	図版7 3号墓出土土器
図版4上 2号墓石室全景（北から）	

# I. 調査の経過

## 1. 調査に至る経過

県教育委員会では、毎年、次年度以降の各種公共事業について事業部局に照会を行い、事業計画を把握すると共に、遺跡台帳との照合・事業地内の分布調査を実施して、埋蔵文化財の有無を確認し、関係各課とその保護について協議を行っている。

こうした中で、平成7年10月13日付け砂第559号により、県土木部砂防課から桑名郡多度町多度地内で国補急傾斜崩壊対策事業（朝押下）の事業計画がある旨の回答があった。当該事業地は、多度経塚等で高名な式内社多度神社が位置する丘陵西方の斜面裾部にあたり、分布調査の結果、事業地周辺では五輪塔や中世陶器などの散布がみられ、また斜面中腹の果樹園ではかつて藏骨器等が出土していることが判明した。このため、小字名をとつて宮地中世墓と呼称し、その保護について砂防課及び桑名土木事務所と協議を行った。

しかし、当該事業地付近は急傾斜が続き、特に裾部では崖状となって民家の後背に迫っている危険な状況であるため、崩壊対策工事の早急な施工が必要であり、また施工範囲も限定されるものであった。

このため、施工時に工事立会を実施することとした。平成8年11月12日に立会いの上、事業地内の掘削を開始したところ、厚い崩落土の下から中世墓石室1基（1号墓）が検出され、さらに複数の中世墓の存在が想定された。そこで、急速協議を行い、事業の緊急性から、工事を一時中断して土木部側から労務提供を受ける立会調査として調査を継続することとし、調査担当については、県公共事業を担当する埋蔵文化財センター調査第一課のみでの対応不可能であるため、調査第二課の協力を得た。また、多度町教育委員会の多大なご協力を受けた。なお、中世墓の遺構が事業地外に広がるものであったが、地主の石川恒生氏のご理解とご了承により全面調査することができた。各位に深く感謝致します。

(杉谷政樹)

## 2. 調査の経過

現地調査は、調査区の東側からバックフォーによ

り表土および崩壊土を除去した結果、遺構と判断される石材が露呈し始めたため、その後人力により遺構検出を実施した。

この石材はその後石室の一部であると確認できたが、出土遺物等から古墳時代のものではなく、中世墓の一種と判断されるに至った。

また、このような墳墓は通常、群集して存在する可能性が強いため、さらに西側に調査の手を伸ばしたが、以外に崩壊土が厚く堆積しており、当初検出された石室墓（1号中世墓）より約1m下で、列石状の石材が集中して確認されはじめ、特異な形態の2号中世墓の存在が判明した。

2号中世墓の調査は、その南半分が調査区外に延びるため、石室墓という立体的な遺構であることもあり、その調査方法が問題になった。

そこで調査区外の箇所については、地主の方にお願いして調査の必要に応じた範囲で拡張することとし、遺構の全容を把握することができた。

しかし、埴丘や石室掘方、果ては西側に延びる石列の検出に至るまで、その適切な判断には困難をきわめた。ただ、これより西側には地形上の制約を含めて、遺跡の広がりはないものと思われる。

調査面積は、最終的に約220m<sup>2</sup>となり、平成8年11月12日より調査を開始し、同月29日に終了した。

## II. 位置と環境

宮地中世墓群が所在する三重県桑名郡多度町は、南北に長い三重県の最北端に近く、木曾三川や伊勢湾を隔てて愛知県と、養老山系沿いに岐阜県と結ばれる地域である。

遺跡の所在する多度町は岐阜県と三重県の境をなす養老山系の末端部にあり、岐阜県南濃町、愛知県海津町、三重県桑名市、長島町、員弁町、東員町と境を接する。

養老山系の最も南に位置する多度山の山麓部やその南の丘陵から派生する緩斜面部は、伊勢湾を望む高台で遺跡が多く存在し、良好な地形条件をもつ。

この丘陵東緩斜面に立地する天王寺遺跡(7)は、300,000m<sup>2</sup>以上にも及ぶ広域遺跡で、これまで昭和55年度、56年度、57年度そして平成4年度の4次にわたり発掘調査がなされており、奈良～平安時代を中心とした聚落遺跡の一部が明らかになりつつある。

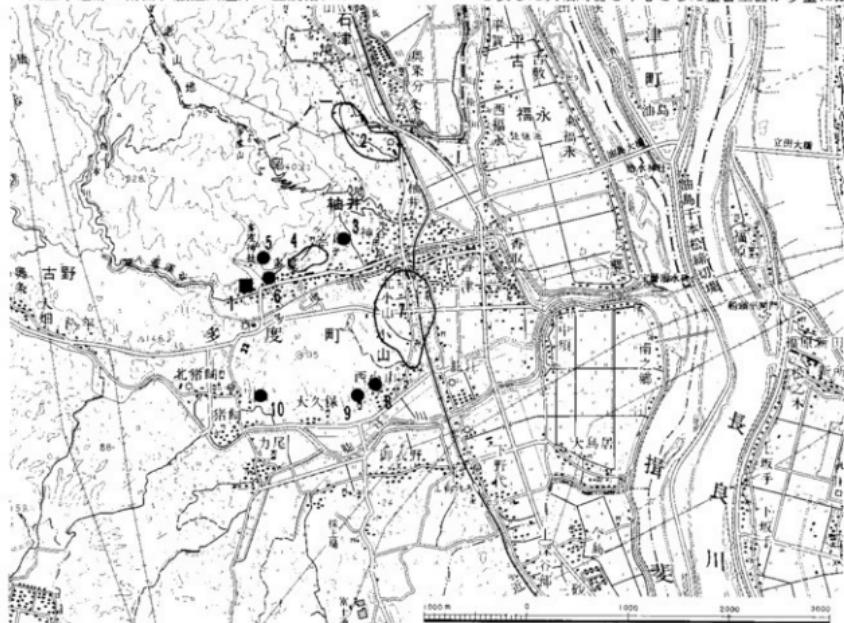
天王平遺跡の南西、肱江川左岸の丘陵裾にはいわ

ゆる白鳳寺院の南小山魔寺（9）が所在する。昭和60年に一部が発掘調査されており、寺院に関わる可能性のある瓦敷き遺構が検出されている。南小山魔寺から出土する軒丸瓦の瓦当文様は、これまで員弁町員弁魔寺や朝日町鷹生魔寺などから出土するものと共通することが知られている。

養老山系東麓の低地部の柚井には、泥炭地の遺跡として柚井遺跡（2）があり、昭和3年頃に、多量の土器類とともに「桜樹郷」の銘がある木簡を始めとして、櫛・弓・火鎌板・堅杵などの木製品が出土している。

木簡銘にある「桜樹郷」は、美濃国石津郡に属する郷名で、現在は行政上、三重県に所在する袖井遺跡での発見は、当時の旧国境を考える上で重要な指標となる可能性がある。

袖井遺跡ではこの他、「平安」「大福」「萬」などを表した灰釉陶器を中心とした墨書き土器が多量に出



第1図 滝跡分布図 (1:50,000) 国土地理院「疊名」1:50,000より

土している。

多度山系の南麓、多度川左岸には、人馬一体となつて急斜面を駆け上がる勇壮な「上げ馬神事」や流鏑馬を現在にまで伝える延喜式内社の多度大社が所在する。多度大社の社域内からは、銅鏡などの祭祀に関わると見られる遺物が出土している。

多度大社の南東には奈良時代後期に多度神宮寺（6）も建立され、延暦20年（801年）の『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』が残っている。

宮地中世墓群（1）は多度大社の西方にあり、多度山南麓の急斜面下に位置し、すぐ近くまで集落が迫っている。また周辺の中世墓としては、多度大社の東方山麓部に愛宕山中世墓群（4）が知られている。

当地周辺は、中世後期には長島一向衆の拠点となり、織田信長勢の侵攻に対して激しく抵抗したが、

元亀元年（1570年）以降、度々の争乱で多度大社をはじめ、多くの寺社仏閣も放火され、大きな打撃を受けている。当地の中世城館としては、多度城跡（3）、小山城跡（8）、猪飼城跡（10）などが認められているが、発掘調査で城館構造等が明らかとなつたものはまだない。



第2図 遺跡位置図（1:500）〈アミ部が調査区〉

### III. 調査の成果

#### 1. 1号墓（第3図）

1号墓は、3基のなかで最も東寄りに位置し、検出面が2号・3号墓に比べると約1mも多い。これは元の自然地形による段差ではなく、2号・3号墓の造営以後、付近一帯が丘陵斜面の崩壊によって一気に埋没した結果生じたものと思われ、1号墓は斜面の崩落後に造営されたと判断される。

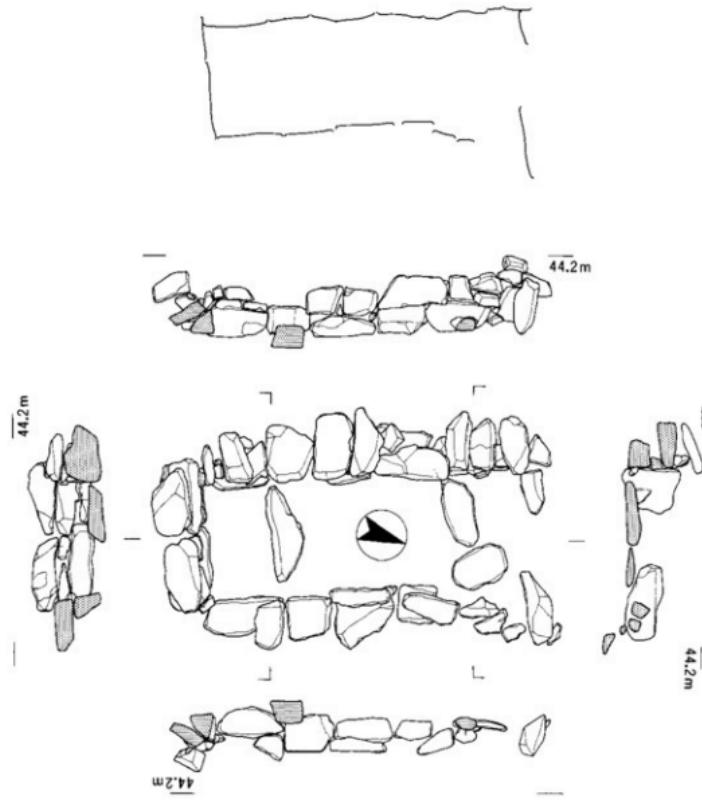
#### 墳墓の形状

石室のみが検出されただけで、墳丘や外表施設、区画溝などは一切確認することができなかった。

#### 石室の形状

石室は基底段から2～3段目までが一部遺存していたが、天井石など上部の構造は不明である。

石室は全長1.8m、幅0.6mで、南壁で高さ0.4m



第3図 1号墓石室実測図 (1:30)

で、塊石を平積している。

石室床面には棺台を目的としたと考えられる平坦面をもつ石材が北壁寄りに2石、南壁よりに1石設置されていた。

#### 出土遺物

遺物は石室内からは鉄釘(5~19)が出土したほか、石室外から土師器皿(1・2)、山茶椀(3)、清郷型と呼ばれる土師器鍋(4)の細片が出土しているが、これらの土器がすべて1号墓に伴うものとは考え難い。

土師器皿(1)は、口径8.6cm、器高1.7cmほどの小型の皿で、口縁端部のみヨコナデし、体部以下はユビオサエ痕を残す。

山茶椀(3)は、底部の破片で、高台等の特徴から、1・2世紀頃に比定できるものである。

鉄釘(5~19)は15本以上の個体数を数えることができるが、すべて角釘で全長のわかるものからすると、4cm弱のものと5cm弱のものとの2種類が存在するようである。

#### 小結

1号墓は、石室の形状はあたかも古墳時代の小石室を彷彿させる構造で、石室の規模や棺台石の存在、鉄釘の出土などから、木棺が安置されていたと考えられ、出土した骨片も荼毘に付された痕跡はない。

明確な石室内よりの出土土器はみられなかったため、造営時期を特定することができないが、3基の中世墓のうち、築造順としては最も後になるものと

考えられる。

#### 2. 2号墓(第6・7図)

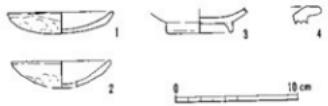
2号墓は調査区の中央に位置し、石室の遺存状態も3基の中では最も良好であった。

#### 墳墓の形状

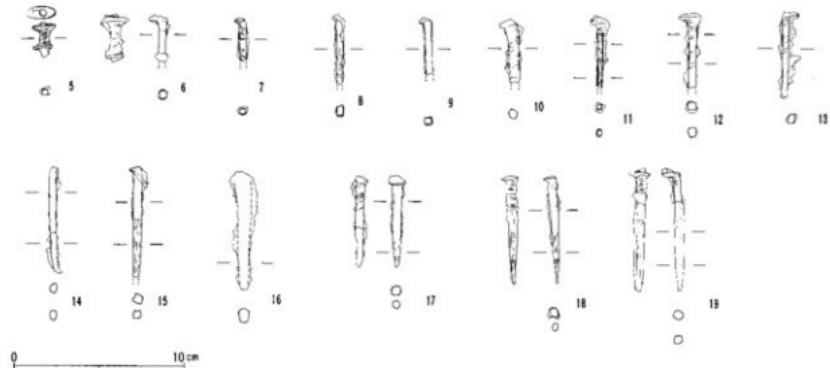
石室の南側と西側および北側の一部に、石室を取り囲むように石列がみられることから、本来墳丘状の高まりをもつものと考えられ、石列は墳墓の基部に配されたものと考えられる。しかし墳墓の東側と北側の一部の石列はすでに失われており、南側も後世に築かれた擁護壁により、原位置よりやや下方にずれが生じているとみられる。

ところがこの石列は、その北側では石室の北壁と連結することから、石室の中心は、墳墓の中心とは一致せず、北側に寄ったかたちとなる。このことから、墳丘は単純な方錐形をとらず、むしろ石室天井部に合わせた高さで方形の基礎を形成すると考えられる。

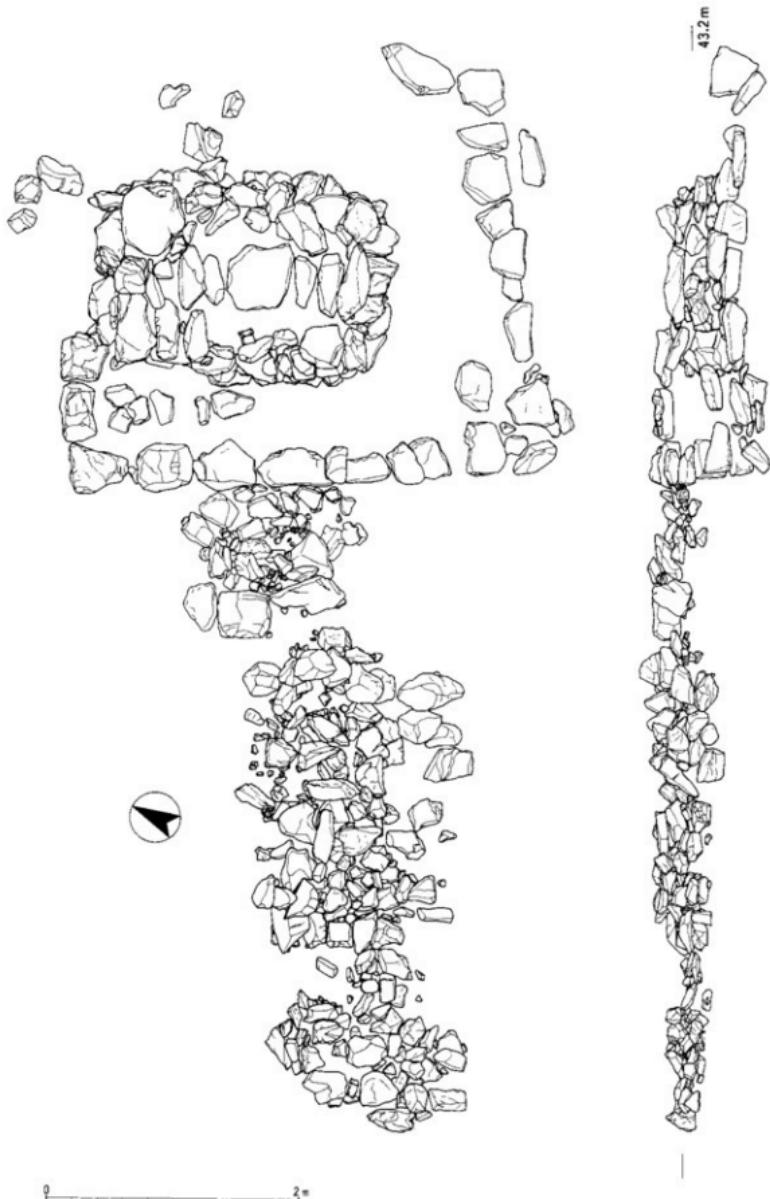
さらにその基礎上に、盛土ないし石塔などの上部構造が存在したかは不明で、その痕跡を示す遺構・



第4図 1号墓出土遺物(1)(1:4)



第5図 1号墓出土遺物(2)(1:3)



第6図 2号墓実測図 (1:40)

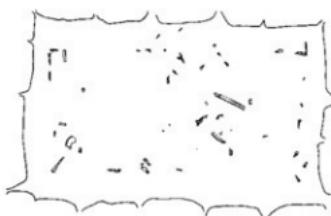
遺物はまったく認められなかった。

また、墳墓の西側にはほぼ東西方向に帶状にのびる集石が認められる。これが2号墓に伴うものか、別の遺構かの判断は厳密には困難であるが、集石が2号墓に連続することから、付属施設的性格が強

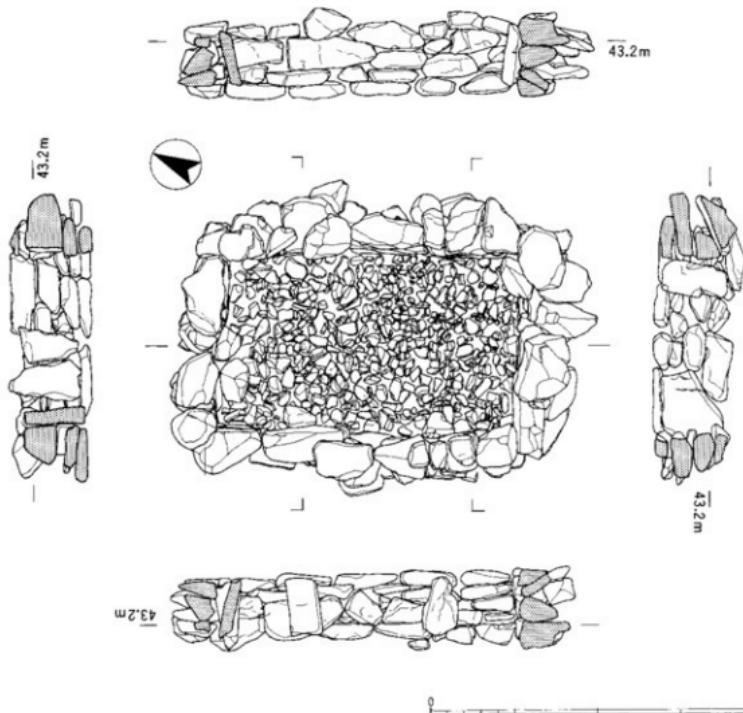
いと考えられる。

#### 石室の形状

石室は、天井石が内部に落ち込んでいたことから、未盗掘で四周の側壁はほぼ完存の状態であったと思われる。石室の規模も3基のなかで最も大きく、長



鉄釘・人骨出土状況（a～cは人骨、図版6下に対応）



第7図 2号墓石室実測図（1:30）

さ1.8m、幅1.1m、高さ0.5mをはかる。

側壁は塊石を中心に用い、平積みする。木棺の固定に用いたとみられる石材が、北壁と西壁で2ヶ所、南壁で1ヶ所、壁面に沿って縦位に立てかけられている。

また、床面には1号墓のような棺台石はみられないものの、全面に数cmほどの大きさの礫が敷き詰められており、その上に木棺を安置したと思われる。

床面からは人骨のほか多数の鉄釘が出土した。人骨は頭蓋骨および大腿骨の一部が残存しており、その出土位置から、頭部をほぼ北に向け、立て膝の状態で埋葬されたと考えられる。

なお、木棺は棺材自体は残存していないが、棺の固定に用いた立石の配置と、鉄釘の出土位置から、長さ1.6m、幅0.7mの大きさに復原でき、ほぼ石室の中央に安置されたと推定できる。

#### 出土遺物

石室内からは副葬品と呼べるものではなく、木棺に使用したと考えられる鉄釘が33本以上、人骨として頭蓋骨と両足の大転骨の一部が遺存していたほか、石室内の崩落土に混入して土師器皿(20)が出土した。

また、2号墓に伴うものとは言い難いものが含まれるが、2号墓の周囲より、土師器皿・鍋(21)、灰釉陶器皿(22)、山茶碗(23)および錢貨(24)などが出土した。

このうち、石室内崩落土中出土の土師器皿(20)は、2号墓に伴う遺物である可能性が高いが、詳細な時期決定が難しい。

土師器鍋(21)も口縁部の細片で、「伊勢型」あるいは「南伊勢系」鍋と呼ばれるものである。口縁部の特徴から鎌倉時代に比定できる。

錢貨(24)は、北宋錢の「元豐通寶」で、初鑄年代は1078年である。

鉄釘(25~57)は、長さにバラエティがあり、2~3cmの短いもの、4~5cmのもの、5~6cm近い長いものに大きく分けることができそうである。いずれも角釘である。

#### 小結

2号墓は3基のなかで最も規模が大きく、中心的な存在である。石室外側に列石をもつことから、石

室上部に一辺3.5m程度の方形の墳丘を伴うと考えられる。

墳丘は石室の中心が墳墓の中心と一致せず、北側に寄ることから、石室上面付近で平坦面を形成する基壇状の高まりのようなものと思われ、本来祠のような構築物があった可能性も考えられる。

また墳墓の西側に接続して延びる集石群は、現状では整然とした配列とならない点に問題が残るが、面的な広がりをもたず、ほぼ帯状に延びることから、石室上部の施設に至る通路的な目的で敷設された可能性も考えておきたい。

石室内に遺存していた人骨は、成人男性一体とみられ、火化された痕跡をもたず、木棺に安置されていることから、やや特殊な階層の人物を想定しても良いかもしれない。

なお2号墳の築造時期は、出土遺物が限られるため断定しがたいが、鎌倉時代と考えてよい。

#### 3. 3号墓(第10図)

3号墓は2号墓の西側に位置し、2号墓に伴うとみられる集石群の下から検出された。

##### 墳墓の形状

石室のみが検出されただけで、墳丘などの外表施設はみられなかった。集石を除去中に確認されたことから、本来何ら外表施設はもたなかつた可能性が大きい。

##### 石室の形状

石室は長さ1.5m、幅0.6mと小規模で、高さは床面から0.3mほどであった。壁面の石材は拳大~人頭大の塊石が用いられ、南壁の遺存状態は良くなかったが、2~3段ほどの石積みからなる。

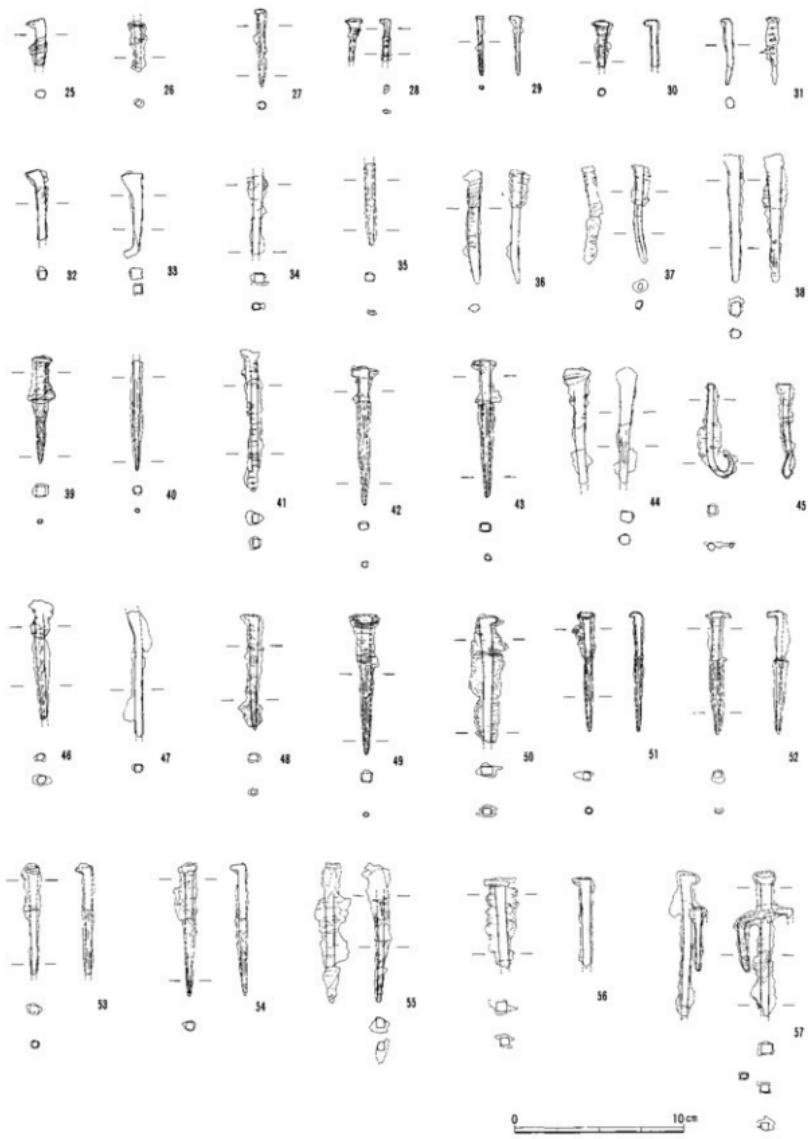
床面には主として拳大ほどの石を敷詰めており、各側壁はその敷石の上に棊かれている。敷石は平坦だが、10cmほどの厚みのあるものを用いている。

##### 出土遺物

石室内から青磁碗2枚と皿4枚が完形あるいはほ



第8図 2号墓出土遺物(1)(24は1:2、他は1:4)



第9図 2号墓出土遺物(2) (1:3)

は完形の状態で出土したが、その出土状況からすると、これらが弧を描くように並べて配置していたと考えられる。

出土した青磁は、椀（5・6）と皿（1～4）で、このうち椀（5）は口径 12.8 cm、器高 6.3 cm で、明緑灰色（10GY-7/1）の釉薬が底部外面および高台の一部を除いて施され、体部外面には肉厚感のない縞蓮弁が描かれ、その上に擣目を継ぎに施す。内面には蕉の葉文様を施す。底部内面は無文である。口縁部が強く外反する。横田・森田氏らの分類でいう龍泉窯系碗 I-6 類に相当する。

椀（6）は口径 16.0 cm、器高 6.7 cm で、緑灰色（10GY-5/1）の釉薬を底部外面および高台の一部を除いて施される。内面には花を 3 単位連続させる蓮華文を施すが、外側は無文である。横田・森田氏の分類でいう龍泉窯系碗 I-2 類に相当しよう。

皿（1～4）のうち、（1）は口径 9.6 cm、器高 2.3 cm で、底部外面を除き緑灰色（7.5GY-6/1）の釉薬が施されるが、全体的に貫入が著しい。底部外面にはトチ痕を残す。底部内面に櫛工具による

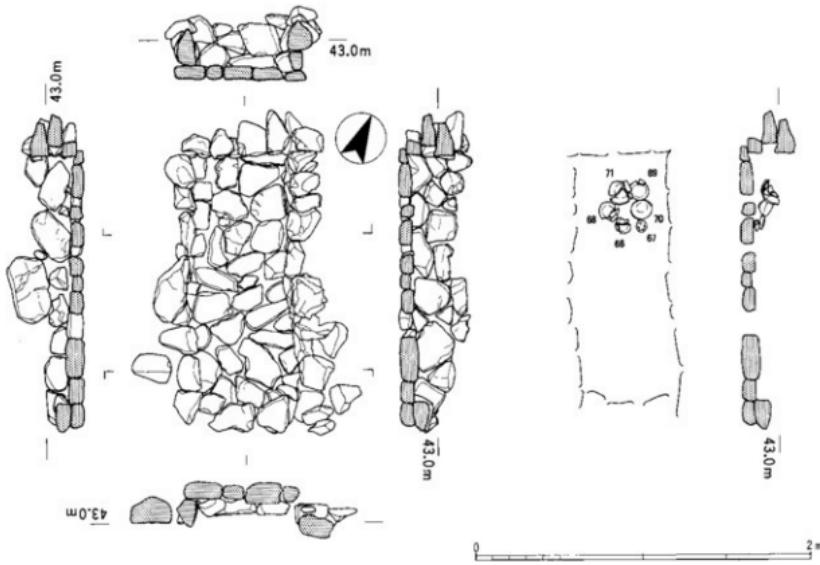
花文を描く。横田・森田氏分類の龍泉窯系皿 I-2 類に相当する。

皿（2・3）は口径がともに 10.8 cm、器高は（2）が 2.2 cm、（3）は 2.5 cm で、オリーブ灰色（（2）が 5GY-5/1、（3）が 10GY-6/1）の釉薬を施した後、底部外面は釉薬をカキとっている。底部内面にはヘラおよび櫛状工具による草花文とジグザグ文を描いている。横田・森田氏の分類に当たるめれば、同安窯系皿 I-2 類に相当するが、底部内面のモチーフは同 I-1 類に例示されたものと似る。

皿（4）は口径 11.0 cm、器高 2.3 cm で、やはりオリーブ灰色（5GY-6/1）の釉薬を施した後、底部外面は釉薬をカキとる。底部内面に（2・3）とは異なるモチーフとなる草花文とジグザグ文を施している。横田・森田氏分類の同安窯系皿 I-2 類に相当する。

これら青磁のうち、椀（5）および皿（1）は、口縁部の一部が欠失しており、おそらく埋納時かそれ以前に故意に打ち欠いたものと思われる。

この他の出土遺物として、鉄釘が 10 本程度出土



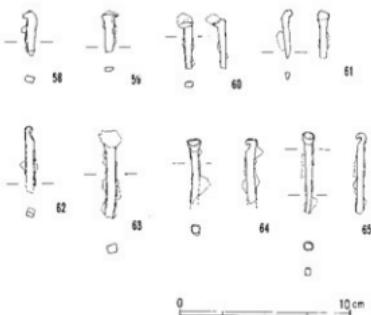
第 10 図 3 号墓石室実測図 (1:30)

している。

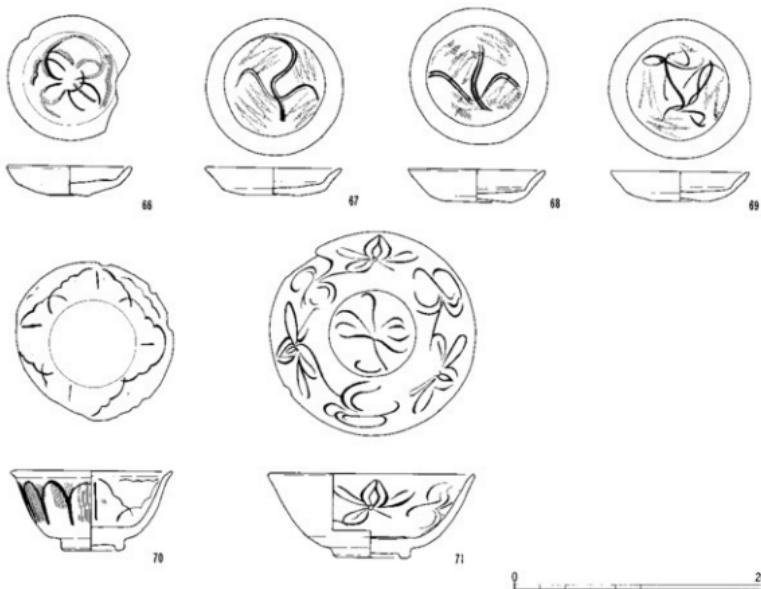
### 小結

3号墓は、小規模の石室ながら、床面に敷石をもち、青磁の椀皿類を計6個体も埋納物として有していた。しかも出土状況から判断すると、それぞれの土器を仰向けの状態で弧を描くように並べており、その配置に何らかの葬送儀礼上の意味をもつと考えられる。また、口縁部の一部を打ち欠くものがある点なども合わせて、古墳時代の須恵器にみられる古墳祭祀に共通し、時代を大きく隔ててもこうした思想が保持されてきていることは興味深い。

出土した青磁碗・皿は、総じて13~14世紀を中心とする年代が与えられるものであり、3号墓の築造時期もおおむね鎌倉時代に比定できるものである。



第11図 3号墓出土遺物〈1〉(1:3)



第12図 3号墓出土遺物〈2〉(1:4)

## IV. 調査のまとめ

### 1. 中世墓出土の人骨（図版6下）

1号墓および2号墓から人骨の一部が出土したが、相山女子短大教授の江原潤氏に肉眼による観察を依頼した結果、以下のような鑑定結果を得た。  
・1号墓出土の人骨は、長管骨（手足の骨の一部）の小破片で、火を受けた痕跡が一切認められない。年齢・性別等については不明である。

・2号墓出土の人骨は、aが後頭部片、bおよびcが大腿骨の破片である。人骨の出土位置やbとcの大転骨片が別の部位であることから、これらは同一個体とみなしてよく、成人壮年の男性の遺骨と考えられる。

### 2. 宮地中世墓群のまとめ

今回調査された3基の中世墓は、調査前にはその存在が知られていなかったもので、予想外の発見であった。なかでも2号墓は、その規模や外形をみても突出しており、外表施設として祠のような構築物が存在したとすれば、信仰対象となった可能性も含めて考える必要がある。

また規模こそ小さいが、3号墓からは青磁碗および皿が6点にも及び出土したことに加え、それらが葬送儀礼の結果を表すかのような出土状況を示していた点も特筆すべきである。

1号墓は、2号および3号墓に比べ、検出面の高さが1m以上高いにも関わらず、自然地形からはこれほどの段差が生じたことへの説明はつきにくい。付近は急傾斜地で、土石流なども起きやすく、あるいは2号墓の築造後、さほど時期を隔てずに崩落土に覆われた可能性が考えられ、1号墓はその後に築造されたという解釈をしたい。

今回調査された3基の中世墓は、いずれも石室をもち、1号墓および2号墓から出土した人骨はともに火化されていない。石室内からは鉄釘が出土し、1号墳には棺台石が配置されるなど、石室内には木棺を安置したと思われる。

### 3. 宮地中世墓群の位置づけと多度大社

宮地中世墓群は、当初は現在宅地化された南側にまで広がっていた可能性はあるが、中世墓群としては狭い範囲に造営された比較的小規模な単位のものと思われる。

しかし、当世墓群と尾根づたいに東方には、多度大社が所在することは注目すべきことである。多度大社は、延喜式内社であることはもちろん、その神階は正二位まで昇叙した神社で、奈良時代後半には、神社の東方に私度僧であった満願が開祖とされる多度神宮寺も建立され、桧皮葺の東塔と瓦葺の西塔の2基の三重塔を有する寺院で、官寺に準ずる定額寺、或いは国分寺に準じる寺という扱いを受けていたという<sup>1</sup>。考古学的には神宮寺跡と考えられる地点から、尾張国分寺所用の軒瓦と同型のものがかつて出土している。

多度大社は、平安時代後期には伊勢平氏の勢力下に入り、その後伊勢国司の北畠氏の庇護を受けたともいわれ、のち織田信長の軍の長島侵攻に際し、美濃国大垣城主氏家卜全により兵火を被ったとされ、江戸時代には桑名藩主の本多忠勝らの保護を受けて復興<sup>2</sup>し、現在に至っている。

多度大社の神域が当時どの範囲まで及んでいたかは定かでないが、宮地中世墓群が位置的にこれと無関係とは考え難い。石室を有し、遺骸が火化されず、信仰対象となった可能性さえ考えられることから、当時の民衆墓としての位置づけだけでは理解し難く、可能性の一つに多度大社の神職者などの地位をもつものを被葬者にあてることも考えられなくはない。

しかし、現時点ではこのことは想像をえた理解にすぎず、今後多度大社の周辺地域の調査が進めば、自ずとその解答が得られるかもしれない。

### 参考文献

- 1)『多度神宮寺伽藍縦起井資財帳』による。
- 2)『多度大社本林略記』などによる。



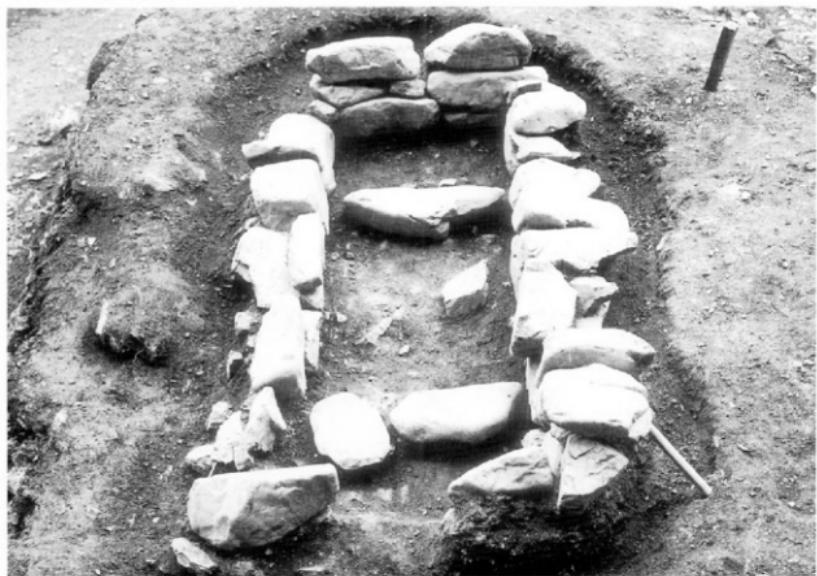
2号墓全景（東から）



2号墓全景（西から）



1号墓石室全景（南から）



1号墓石室全景（北から）



2号墓天井石検出状況（北から）



2号墓天井石検出状況（南から）



2号墓石室全景（北から）



2号墓石室近景（北から）



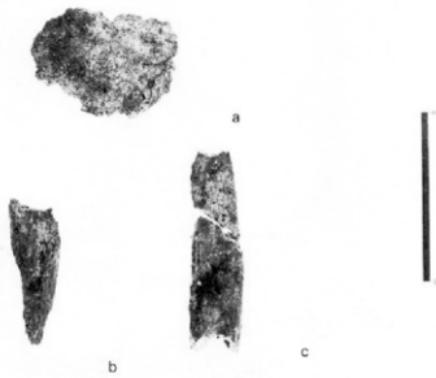
3号墓石室全景（北から）



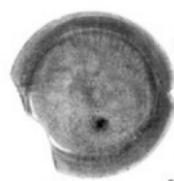
3号墓遺物出土状況



2号墓出土铁钉



2号墓出土人骨



66



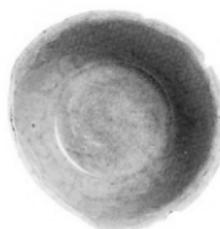
67



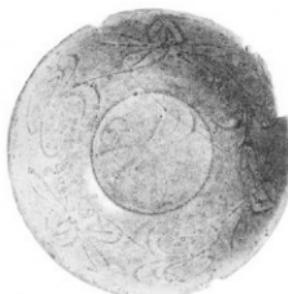
68



69



70



71



## 報告書抄録

ふりがな	みやぢらみうせい ばぐん はくくつちよう き ほうこく
書名	宮地中世墓群発掘調査報告
副書名	
卷次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	149
編著者名	竹内英昭
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965 (2) 1732
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやぢらみうせい ばぐん 宮地中世墓群	くわな ぐんた ど ちょうた ど 桑名郡多度町多度 あざらようはいした 字朝 拝下	243019		35° 8'	136° 37'	19961112 19961129	220	急傾斜地崩壊対策 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な想遺構	主な遺物	特記事項
宮地中世墓群	中世墓	鎌倉時代	石室墓3基	輸入磁器・鉄釘	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに  
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告 149

三重県桑名郡多度町多度  
宮地中世墓群発掘調査報告

1996・3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷者 東海印刷株式会社

---